



消えゆくものへの讃歌

小さな沢の小さな生き物

トワダカワゲラという水生昆虫をご存知だろうか。カワゲラの仲間である。カワゲラの幼虫は環境省の水質判定に使われる指標生物で、きれいな水でなければ生きていけない虫である。

トワダカワゲラは、「日本産水生昆虫」(東海大学出版会発行)によると、「大型で成虫・幼虫ともに無翅。谷沢や細流に生息。日本では4種が確認」「生息場所の水温は一般に10℃以下」「和名は最初に個体が発見された十和田湖畔の細流に由来」とあり、栃木県が作成した「レッドデータブックとちぎ」にもしっかりとその姿が記載されている。「栃木の水を守る連絡協議会」の葛谷理子代表が横根山のある沢で発見、三年間の調査を経て2000年に同定されたものもこのカワゲラの一種「ミネトワダカワゲラ」であった。トワダカワゲラはカワゲラの中でも特定の水域しか生息していない特殊な虫で、腹部の末端のみにある鰓(エラ)から水中の酸素を取り入れて命を保っている。寿命は4年ぐらい、成虫になっても水中に留まっており、平地の川では絶対に見つけることができないカワゲラである。

昨春(2010年)湯西川の県道横の小さな沢で偶然、この虫と出会った時はとても驚いた。なんとといっても尻のあたりにひらひらする、薄いピンク色のものが最初に眼に飛び込んできたからだ。虫はそれを出したり入れたりしていた。初めて見るカワゲラ、ミネトワダカワゲラだった。名前は知っていたが実物は一度も見たことがなかったので、不思議な姿をした虫に見入っているうちに、「こんな小さな沢にお前たちよく生き残っていたねー。えらかったねー。」と声をかけたくなってしまった。

この沢は、斜面中程の大岩の下から突然水が湧き出ており、山中の伏流水が一気にそこに現れてきているようだ。水温はとても低く、9℃だったように記憶しているが、飲用としても申し分ない水で、隠れた名水だと私は思っている。

今年、湯西川ダムへの貯水が始まると、この沢は消滅する。今まで長い時間をかけてひっそりと子孫を残してきたこの生き物達が消えていくのは、もう時間の問題となった。人口減少時代の入り口に立って思うことは、ダムが完成すればそれでおしまいということではなく、今後の維持管理には大変な経費がかかり、それは私達の税金に組み入れられていくという現実だ。この地に四つ目のダムは不要であったのに。山地に建設されるダムの宿命というべく、五十里ダム同様いずれこの湯西川ダムも土砂流入が進んで、土砂溜めダムと化していくのだろう。

落葉樹の明るい林の横を流れていった湯西川の姿は、もう記憶の中にしか残っていない。細々と命をつないできた小さな生き物達が完全にこの世から消えてしまった時、日本人の基層になってきた山や川や水に対する畏怖の心も私達は失くしてしまおうのだろうか。今、日本中が壊れていくように思えてならない。

(塚崎 庸子)

目次:

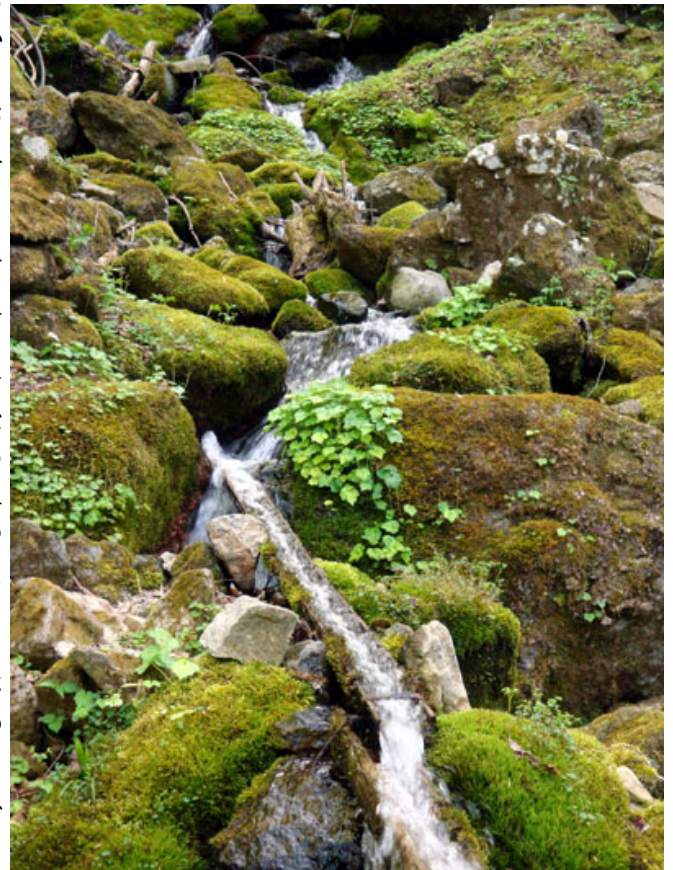
消えゆくものへの讃歌	1
山紫水明	2
ヌメリスギタケモドキ	3
川むしたんけん隊	3
川むしアルバム	4
活動報告	

お知らせ

次回の定例会

1月26日(水)

日光市民活動支援センター
午後1時~2時



京都・水雑感

昨年(平成22年)は、初秋に数十年ぶりで京都に出かける機会を得た。その時のことを水(川)を中心に少し記しておきたい。

滞在したのは東山白川筋というところで知恩院の近く。白川は、このあたりでは川幅は4~5メートル。深さは10センチぐらいの流れだが、さすがに美しく、ゴミなどもほとんど見られないのには感心した。川端には柳が植えられていて、兩岸は小さな階段で下りられるようになって夕方になると沿岸の家々から出てきた人達がバケツなどで水を汲んで植木や花などにかけてあげている。そうしたことがごく当たり前に行われていた。

また、そこには人が渡るだけの用途の、欄干など全くついてない60センチ幅ぐらいの橋が沢山あった。とても人間くさい橋で用事がなくても、なんとなく渡りたくなる。便利なこともあって地元の人も観光客も老いも若きも大勢の人たちが渡っていた。

川を渡るということでは面白い体験をした。出町柳の近くで加茂川と高野川という川が合流して一本となり鴨川と名称を変える。この合流地点はバスで通りかかって、なかなか気持ち良さそうなので、弁当でも持っていってみようかと出かけてみた。このすぐ北の、糺(ただす)の森を越えると下鴨神社だ。出町柳の方から行ってみると高野川には合流地点まで飛びとびに1メートル四方位の大きな石が何個も川の中に置かれていて渡ることができるようになっているではないか。ここはけっこう、観光のスポットにもなっているのかもしれないが、初めて目にするとなかなか魅力的で自分で渡ってみたいくなる。ところがいざ渡り始めると石自体が亀石や何とか石と彫刻が施されているものもあって、どこへ足を置いたらバランスを崩さずに渡れるかと考え考え足を運ばねばならない。中ほどまで来ると流れも急になり、水量も結構多い。風も吹いてきて帽子を飛ばされそうになったりして、いつの間にか真剣になっている自分に気付いて苦笑してしまった。

鴨川は昔と変わらぬ風情を見せていたが、昔と比べると特に上流部では土砂が堆積してそこに草が生え、ちょうど中



州のようなところが沢山できていて、昔のように、すっきりした流れではなくなっている。地元の知人の話では、自然保護を重視する人たちが、鳥たちの営巣地になっている河原の堆積物を取るなど主張して、市の方でもそれを考慮しているとのこと。確かに白鷺などが人を恐れず、人のすぐそばまで平気で近づいてくるのには感心した。今市では考えられない。

無事合流地点に到着して、岸辺に座って昼食に取りかかった。おにぎりなどほおぼっていると、今度は上部になにかの気配を感じて目を上げる。なんと巨大なトンビが音もなく近づいていたのだ。あわてて及び腰で防衛体制に入りますが、こちらが気づいたことが分かったと、さすがにあきらめて遠去かって行ったが、後で地元の新聞がこのことを特集していたほどで、結構『トンビにアブラゲ』というのが現実には起きているようだ。

いずれにしても鴨川は水深もそこそこでサラサラと流れる感じで日本の自然のやさしさの側面の象徴のようにも思われた。

とりとめもない話になってしまったが、最後に『山紫水明処』という建物のことを記しておきたい。

鴨川の右岸、丸太橋通りのほとりに江戸時代の陽明学者、頼山陽の書齋が残されている。古い岩波新書の『京都』[林屋辰三郎著]という本の見開きに、この建物の部屋の中から比叡山や鴨川を見た写真が掲載されていて、建物の名前(「山紫水明処」)にも惹かれて見学を申し込んだ。

私たち二人のためにわざわざ二名のボランティアガイドの方が来てくれていて、指定の時間までに建物をきれいに掃除して待っていてくれた。ここでいただいた案内書によると山陽はこの地がよほど気に入っていたと見えて『京都は三都第一の景勝である』と書いていたとのことであるし、また『関白我也』と書いて絶景の一人占めを得意がったとのことである。確かにその四畳半の座敷に座ってみると、高い建物さえなければ、東は吉田山を手前にして、はるかに比叡山から東山を一望の下にすることができるのは容易に想像がつく。

興味深かったのは山陽がこの建物の、手すりつきの縁側から釣竿を垂れて魚を釣っていたという話。当時は、この書齋の下の石垣を洗うようにして鴨川が流れていたのだという。現在ではそんなことは想像もつかないほど、建物が川の流れから離れているし、川底も低くなっている。これは川の氾濫を防ぐために後世行われた工事の故とのこと。この建物から釣りができるほど川幅が広く、浅い流れの鴨川はどんなに美しかったらうなどと想像しながら、ボランティアの方たちと時間も忘れて話が盛り上がった。ここでも失われたものの大きさのようなものを感じつつ、山紫水明処をあとにすることとなった。

(森)





画像は <http://www.weblio.jp/>より引用しました。

又メリスギタケモトギ
柳の木に、にぎりこぶし大のキノコを発見。
又メリスギタケモトギ。やたら長い名前の
このキノコは、あまり専門に採る人は
いないが、ナメコに似た食感のなかなかう
まいキノコだ。
普通キノコ採りは、エの上や倒木の周りな
どを探すものだけど、このキノコはけっ
こう高い所で見つけることが多い。
大形のキノコなので六〜七個もあれば、四人
分位のなべが泳木しめる。
サ如でこぼし水洗いをして、傘と柄を切り
分ける。傘は割いてなべに、柄は細く割
いて、サトウ、しょうゆで佃煮風にする。、
リヤキツヤキした歯応えでイけるのだ。
来シーズンは、柳の木を見かけたら採し
てみたらずい。
運が良ければ採れるかもね？。
隅

川むしたんけん — 砥川橋上流

10月10日(日) 10:00 ~ 12:00

NPO法人 なんとなくのにわサイエンス・カフェ に協力

「毎日クリスマス」さんのご厚意により昨年から利用させていた
だいているここは、たんけんをするのにとっても良い雰囲気のところ
だ。まず何といっても水生昆虫を見つけやすい所であること。そし
て、トロ場があり、そこに流れ込む川のたたずまいが、遠い記憶か
ら抜け出てきた光景とぴったりの場所でもあるからだ。

トロ場はゆったりと泳ぐ魚たち。岸近くの岩の下からは大型の水
生昆虫も見つかる。時折、岩盤を伝ってカワガラスが動き回り、し
きりに嘴を突いているのは餌のサワガニを見つけたからだろう。こ
の場所に来ると自分が人間であることを忘れてしまいそうになる。
しかし、この川は全くの自然の川ではない。上流の月山には揚水
式発電ダムがあり、年間を通して放水量などが管理されているの
だろうと思う。

だが周辺の林に目を移すと、そこには落葉広葉樹の多いこと
に気付く。この林があるからこそ、しっとり落ちついた溪流とな
り、木々に守られ、そこから栄養を得て、しっかり生き抜いている
生き物たちがたくさんいる。次回はどんな生き物たちと出合えるか
楽しみだ。

真夏の光線が木漏れ日となって水中に溶けていく時、魚たちと
一緒になってこのトロ場で泳いでみたい。この場所に立つといつ
もそう思う。こんな冒険を、子供達にちょっとだけでも体験させてあ
げたいのだが、どうだろうか。(塚崎)



活動報告

- 6月23日 (水) 定例会
- 7月28日 (水) 定例会
- 7月31日 (土) 川むしたんけん隊
いのくら児童クラブに協力
- 8月25日 (水) 定例会
- 9月29日 (水) 定例会
- 10月10日 (日) 川むしたんけん隊
(NPO法人なんとなくのにわ・サイエンス・カフェに協力)
- 10月27日 (水) 定例会
- 11月24日 (水) 定例会
- 12月22日 (水) 定例会

だいや川通信
第30号



郵便振替口座

00140-4-535550

連絡先

〒321-1102 日光市板橋1732-1 森 方
今市の水を守る市民の会
 0288-27-2183 (8時～17時:森)
 0288-26-3324 (17時～21時:塚崎)
<http://somesing.net/daiyagawa/>

川むしたんけん隊 (田川・いのくら児童クラブ) 7月31日 (写真提供: NPO法人 和音)



この日の田川は水量が多かった。



この虫は何だろう...



クラブに戻り、ゆっくり観察

今回で「だいや川通信」は第30号になりました。
 2000年5月5日の創刊準備号(右図)から数えて、
 31回目の発行になります。バックナンバーは、
<http://www.somesing.net/daiyagawa/news/index.html>
 に置いてあり、自由にご覧いただけます。
 今後も年2回のペースで、のんびりと作っていきたいと思います。原稿、
 記事の提案など、ご遠慮なくお寄せ下さい。
 本年もよろしくお祈りします。

(手塚)

編集後記

つい最近、文部省唱歌「ふるさと」を3番まで歌う機会があった。歌いながらふと、この歌詞は故郷から離れて働いている人の思いを歌っているのだということに気付いた。いままで考えもしなかったのだけれど、「故郷は昔のままあり続けてほしい、私はいずれは錦を飾り帰るから」という、田舎に暮らす人間から見たら、とても身勝手な歌なんだなと思った●「ふるさと」は「1914年(大正3年)、尋常小学唱歌の第6学年用で発表された」(ウィキペディア)という。この時期、学校は富国強兵のために組織され、「志を果たす」ために、故郷を出て行く生き方が奨励された。では、故郷に残り、「うさぎ追いかの山、こぶな釣りしかの川」に描かれた風景を守るのはいったい誰なのか。そんなことは気にもされないまま、メロディの美しさから歌い継がれてきた歌だったように思う●故郷を出て行った人たちは何をしたのだろうか。軍人になり戦争という最大の自然破壊を指揮したり戦ったりしたかもしれない。国の偉い役人になってダム工事の計画を練ったり、工場を作って毒の水を流したりしたかもしれない。けれど、その人たちも自分の故郷に砲弾が飛んだり、山や川が汚れたりするのはいやなのだろう。だから故郷は「山は青く、水は清く」あってほしいと3番の歌詞にある●都会に人が集中し、消費される食料や水やエネルギーを外に求める。その結果、都会はますます便利に、快適になるいっぽう、農村は人が減り元気がない。いま、「ふるさと」は、この国が抱えているそんな矛盾をあらわす歌になってしまった。

(T)

「今市の水を守る市民の会」通信 (創刊準備号)	今市の水を守る市民の会 創刊準備号 2000年5月5日(金)
「今市の水を守る市民の会」発足にあたって 懐日死の山々の小さな谷から生まれ出た水は、たぐさんの滝を下って大谷川になります。大谷川が長い年月をかけて作った懸状地に、私たちの住む今市市が位置しています。私たちは、大谷川の豊かな水を、豊かに、暮らしに、さまざまな形で利用して生きてきました。この懸状地に住む人々の命をくぐり大谷川は、昔から命で水が豊富でした。 1964年(昭和39年)に計画された「懸川開発事業」は、豊富な水不毛を解消するため、豊田市の懸状地に巨大なダムを建設するという構想で始まりました。大谷川から水をとり、「南無ダム」まで延長20kmにおよぶ地下導水管で水を運ぶというものです。 計画が発表されてからすでに30年が経ち、この開発事業は、はじめの目的を失い、もはや時代遅れの構想となりました。取水によって今市の農業用水はどうなるのか? 地下に建設される導水管が今市懸状地の地下水を枯らすのでは? 今市地蔵の懸状地に計画されている行田ダムの完成は? 大谷川や行田川の動物への影響は? などなど、疑問だらけの「大谷川取水」は、私たち今市市民にとって程のメリットもない、将来にわたって大きな損失となる計画です。昨年3月、今市市役所の大谷川取水対策委員会は「必要性と安全性を確保する水資源開発公団の取組には賛同がある」とした最終報告書を発行しています。	日次: 「今市の水を守る市民の会」1 発足にあたって 4月定例会報告 2 沼澤部会と沼澤部の3 一掃隊について 本誌の発刊は 5月13日(土) 3 大会の開催 4 会報の発行と「今市」4 は「今市」の未来!
「市民の会」は、大谷川取水および懸川開発事業中止に向けての活動を行っています。それに加えて、「今市の水」をキーワードに、自然環境や農業などについて理解を深め自然と調和した町づくりを推進するための学習会や、市民参加のイベントなども開催していきたいと考えています。皆さんの力と声を、ぜひ、「市民の会」にお寄せください。一緒に考え、行動していきましょう。	ハイライト 1 定例会報告 1 活動報告 1 沼澤部会一掃隊の活動 お知らせ 1 シンポジウム、ロケマーク募集中!
2000年4月 大谷川の水は、今市市民の宝です。取水 今市の水を守る市民の会 代表 塚崎 隆	